

鹿児島の昆虫70

「虫の名は？」

昆虫担当 中峯 敦子

12月の企画展は、鹿児島の石材を紹介する「石の名は？」です。現在、急ピッチで準備が進められていますので、25日からの開催をどうぞご期待ください。さて、そんな企画展にちなみ、今回は、昆虫化石についてお話しします。

1 石に眠る虫



後藤康氏所蔵昆虫化石

今年、ある昆虫化石を見せていただきました（上記写真）。薩摩川内市久見崎町の東郷層（珪藻土を含むシルト層）から産出しました。この層は、約300万年前後（鮮新世後期）の地層だそうです。

昆虫化石では、翅の化石が多く見られます。昆虫の翅は、軽さと丈夫さを兼ね備えています。また、堅い翅で腹部や後翅を守ることもあり、化石に残りやすいようです。まれには、体全体や斑紋まで残っている化石もあり、そういった点で、上記の化石は、翅、触角、脚の一部など、体の各部分が多く残る貴重なものと分かります。

2 虫の名は？

化石であっても、昆虫であるならその名前が知りたいもの。少しでも分かることがないか調べました。

線状の触角や長い腹、ハエ・アブ類より小さい複眼など、全体の特徴からハチ目、中でもツチバチかヒメバチの仲間ではないかと考えました。

そこで同定に必要な翅脈（＝翅に走る筋）をスケッチしました。ところが、見だせる翅脈は意外に不鮮明で、描けた脈はわずかでした。また、各種の特徴がよく出る、胸から

腹の形状が潰れていて分かりません。

結局、ハチ目や昆虫化石に詳しい研究者の方々にもお伺いしました。そこで、不明な点が多いが、中でも強いて言えば、

- ①ヒメバチ科ヒメバチ亜科の一種
- ②キバチ科の一種

の印象をもつとの見解をいただきました。

化石となった昆虫の名前が明らかになることはごくまれです。今回も、名前にはさすがにたどり着けませんでした。約300万年前の久見崎を飛び回っていた「あるハチ」との対話を楽しんだ時間となりました。

3 新種なのに絶滅種



岩尾雄四郎氏所蔵昆虫化石

上の写真は、薩摩川内市東郷町で採取された昆虫化石です。くしくも前出の化石と同じ東郷層から得られました。発見後、研究者によりこれまでに知られていないケバエ科の一種であることが分かりました。そして現世には存在しない種であることが分かりました。つまり、新種であり絶滅種でもあることが判明したのです。交尾中のまま、あえなく化石になってしまったため、和名「ナカヨシトゲナシケバエ」と名付けられました。

大昔、後世の人間がつける名前などお構いなしに、飛びまわり這い回っていた生物の躍動を、化石は今に伝えています。